



叙 勳

機械系の復興と再生	5
「若手研究官海外派遣による最先端科学・工学グローバル・キャリアアディベロップメント」について／米コーネル大学派遣報告／在外研究滞在記（英国ロンドン）／派遣学生報告書	2
東北大学大学院工学研究科次世代航空機研究センター	6
リーディング大学院「グローバル安全学トップリーダー育成プログラム」	11
国際機械航空工学修士コースの状況	11
震災後の機械・知能系建物の本格復旧	12
学生支援に関する報告	13
震災支援を受けて	13
機械系広報推進室の活動／産学連携推進室だより／最終講義	14
同窓会だより	15
総会予告／事務局より／編集後記	16

東北大学機械系同窓会

〒980-8579
仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-01
東北大学工学部機械知能・航空工学科学科内
電話：(022) 795-6926
FAX：(022) 795-6926
E-Mail：dousou@mech.tohoku.ac.jp
URL：http://mech.tohoku.ac.jp/dousou/
郵便振替口座 番号 02270-8-11176
名称 東北大学機械系同窓会
印刷 笹氣出版印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会は、会員皆様が納入される会費によって運営されています。同封の振込用紙を使って会費納入をお願い致します。

◎年会費 2,000円

阿部博之元総長・名誉教授 瑞宝大綬章受章

ナノメカニクス専攻 教授 坂 真澄



阿部博之先生におかれましては、平成二十四年五月八日に天皇陛下から瑞宝大綬章を受章されました。会員一同心からお祝い申し上げます。

阿部先生は、本学工学部機械工学科を昭和三十四年に卒業され、昭和四十二年本学講師、昭和四十三年助教を経て、昭和五十二年に教授に昇任され、平成五年から二年間工学部長および大学院工学研究科長を務められました。

次いで、平成八年第十八代本学総長に就任され、学内改革の諸問題に真摯に取り組まれ、国立大学法人化等へのご対応では、いかにすれば総合大学としての実を一層促進できるかという観点から新しい組織づくりの方向指針を示されました。また、本学の研究教育支援体制の強化を図るとともに、創立百周年記念事業の推進、学術交流協定締結等の国際交流の推進にも多大な貢献を果たされました。本学教育研究組織の拡充整備にも全力を傾注され、現在の本学の礎となる多くの組織を設置され、教育研究の場に相応しい学園づくりを実現されました。

阿部先生が推進してこられた研究の特筆すべきこととして、破壊力学／工学の拡張に関する研究があります。破壊力学において、従来、およそ数百ミクロンから数十センチメートルの範囲にある大きさのき裂が対象とされていたのに対し、

この範囲より大きい、または、より小さいき裂への展開を、率先して図つてこられました。大きいき裂の例は、人工的に作成されたき裂を介した地下の高温の岩体から流体への熱抽出であります。き裂の大きさは、実用規模ではキロメートル級であります。阿部先生らは一連の研究で、地熱抽出地下システムの工学的設計法を提案し、有効性を実証されました。

一方、微細な部材の破壊についての第一の例は、光ファイバーの寿命の予測であります。阿部先生らはファイバー内のき裂を直接計測する方法を発見し、き裂進展挙動を飛躍的に向上した精度で評価できるようにしました。微細構造の第二の例は、金属配線における電子の流れに起因した原子の移動による損傷であります。阿部先生らはポイド（原子の欠陥）の集積によつて生じる欠陥を的確に評価できるようにして、従来実現されていなかった配線の寿命の正確な予測を可能にされています。以上の例のように、破壊力学／工学の使命であるき裂／欠陥の進展挙動ならびにそれに基づく工学構造の健全性の評価について多くの独創的な考察をするなど、従来の破壊力学を大きく変えられました。

その他、固体材料の力学理論解析に關連し、薄板の大きいたわみに関する基礎式の導出に成功され、真の変形挙動を解

明されました。これらの多数の独創的かつ先駆的な研究により、国内外の学会より多数の賞を受賞されることともに、紫綬褒章を受章されておられます。

他方、学会などの関係では、日本機械学会の会長をはじめ、多くの要職を歴任され、これらの発展に貢献されました。また、米国工学会アカデミー外国人会員に選ばれておられます。

平成十四年、二期六年間の総長の重責を全うして任期満了により退官されました後には、平成十五年から四年間内閣府総合科学技術会議議員（常勤）の要職をお務めになり、有識者等委員を中心に幅広い層の意見を束ねられています。とくに第三期科学技術基本計画にあたっては、小泉首相（当時）の指示のもと、有識者の筆頭議員として、その原案作成にリーダーシップを発揮されました。

その他、知的財産戦略会議座長（内閣総理大臣）、科学技術・学術審議会会長（初代）（文部科学省）をはじめ、多くの要職を歴任されています。とくに総長の職にあった期間は国立大学法人化に向けての議論と大学改革の期間と重なっており、先生が、国立大学協会の要職や文部省、文部科学省の委員長として、率先して様々な難問の克服にあたられたことは特記に値します。平成十九年から現在ま

では科学技術振興機構顧問（非常勤）をお務めになつておられます。以上のように、阿部博之先生は、機械

工学の発展、東北大学の発展、そして教育・科学技術行政に尽くされたものであり、その功績は誠に顕著であります。

阿部博之先生の瑞宝大綬章受章は本会員にとりまして誠に喜ばしいことであります。

小林陵二先生 瑞宝中綬章のご受章に寄せて

機械システムデザイン工学専攻 教授 福西 祐



機械系同窓会の皆さまに小林陵二名誉教授が平成二十四年五月二十九日付けで瑞宝中綬章を受章されましたことを謹んでご報告申し上げます。

小林陵二先生は昭和七年岩手県のお生まれで、昭和三十年に東北大学工学部を卒業されました。大学院に進学され、昭和三十五年に大学院博士課程を修了され

た。その後引き続き石巻専修大学理学部教授を務められ、平成十年四月から十三年三月まで石巻専修大学理工学部長、平成十三年四月から十九年三月まで石巻専修大学長を務められました。平成十九年四月には石巻専修大学名誉教授にもなられています。

て工学博士（東北大学）の学位を授与されておられます。その後、高速力学研究所講師、同助教授を経て昭和四十七年四月に高速力学研究所教授に昇任となり、昭和六十年四月に当時の機械工学第二学科に配置換えになりました。その間、昭和四十一年八月から四十三年七月までドイツ連邦共和国（西ドイツ）フライブルク大学にアレクサンダー・フォン・フンボルト財団奨学研究員として留学され、ゲルトラー渦で有名なゲルトラー教授の下で学んでおります。平成八年三月には東北大学を定年退職され、同四月に東北大学名誉教授になられました。私は、平成元年からご退職までの数年間、助手あるいは助教授として小林陵二先生と一緒に時間を過ごす幸運に恵まれ、研究者としての姿勢を学ばせていただきました

平成三年にそれまでの機械工学科、機械工学第二学科、精密工学科を機械知能工学科、機械電子工学科、機械航空工学科に改組された時には、大宮司先生、箱守先生とともに陣頭指揮を執られ、難しい調停役として奮闘されました。これは機械系にとって前代未聞の大改革で、現在の機械系の組織・体制の基盤がこの時作られたと思います。毎日早朝から夜零時過ぎまで当時の文部省とやり取りをされており、私どもも書類作りのお手伝いのため待機しておりました。とても大変でしたが、今となつては懐かしく思い出されます。

小林陵二先生の研究分野は流体力学および流体工学の広い範囲にわたります。特に三次元境界層の遷移およびウオータージェット技術の基礎に関するご研究はあまりにも有名です。故伊藤英

寛先生とともに設計・製作された流体力学研究所の低乱熱伝達風洞は乱れが極めて少ない高性能風洞として三十年余りたつた今なお世界最高レベルの性能を誇っております。また、ウオータージェット技術黎明期においてその学術的なバックグラウンドを固める基礎研究分野においてまさに世界をリードされ、日本ウオータージェット学会会長、国際ウオータージェット技術学会の理事会議長（Chairman of the Boards, International Society of Water Jet Technologists）なども歴任されました。受賞に関しては数が多過ぎるので割愛させていただきます。

平成二十四年七月七日にホテルメトロポリタン仙台にて研究室同窓会を兼ねたお祝いの会を開かせていただきました。奥様にもご出席いただき、機械系現職教員も多数ご参加いただきました。小林先生のお人柄も会って研究室同窓会はいつもそうなのですが、和気あいあいとした、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。先生は今もダンディーそのもので私が初めてお会いした二十五年ほど前のままです。颯爽とした身のこなしは、

まるで時間が止まっているかのようです。高校時代に器械体操平行棒で日本一

となられたスポーツマンだけに、我々とは鍛え方が違うんだなあ、と改めて感心

した次第でした。

箱守京次郎名誉会長が 瑞宝中綬章を受章されました

機械システムデザイン工学専攻 教授 内山 勝



すでに新聞・TVなどで報道されていますが、昨年十一月三日に「平成二十四年度秋の叙勲受章者」が発表されました。その中で、箱守京次郎名誉会長が、瑞宝中綬章を受章されています。おめでとございます。

箱守先生は、昭和三十年三月に東北大学工学部精密工学科を卒業、その後、昭和三十五年三月に東北大学大学院工学研究科精密工学専攻博士課程を単位取得退学、同年四月に東北大学工学部助手に任ぜられました。昭和三十七年三月には同上博士課程を修了され、工学博士の学位を取得されました。同年四月東北大学工学部講師、昭和四十年四月東北大学工学部助教授、そして、昭和五十年六月東北大学工学部教授に昇任され、自動制御学講座を担当されました。

平成元年四月から平成三年三月まで工学部入試検討委員会委員長、平成二年四月から平成四年三月まで東北大学附属図書館工学分館長、平成五年九月から平成七年十二月まで東北大学百年史構想検討委員会委員などを歴任され、本学の発展に貢献されました。平成八年三月、停年により退官され、同年四月に東北大学名誉教授の称号を授与されています。平成

八年四月一日より東北学院大学工学部・同工学研究科教授として、平成十六年三月まで在任されました。

先生は、非定常流計測、制御系設計、ロボットなどに関する研究に従事され、機械システムの計測制御技術、特にメカトロニクス、ロボティクスといった、近年新しく発展した高度先端技術の啓蒙に尽力するなど、我が国の学術及び計測制御技術の発展に多大なる貢献を果たされました。

非定常流計測では、世界に先駆けて、高速、高圧、小口径の電磁流量計を開発し、流体回路特性、信号発生、発信現象の研究及び導電添加剤を使用する石油流量測定の研究を推進されました。また、ビーム走査レーザ流速計を開発し、管内非定常流の流速プロフィールを測定されました。この研究成果に基づき、カルマンフィルタを応用した各種管内非定常流の測定法を提案・確立されました。

制御系設計の研究では、周期係数系の特性乗数配置法の研究、リーマン幾何学モデルを用いた非線形制御系設計の研究、同手法に位相幾何学の考えを加えた履歴特性を含む非線形系の制御の研究、不連続最適制御問題の数値解法アルゴリ

ズムの研究などの分野で独創的な手法を提案されました。

ロボットの研究では、マニピュレータの機構の評価と操作性、力覚センサの特性評価と設計手法、手先力のダイナミックセンシング、柔軟アームの可補償性概念の提案と補償制御、双腕ロボットの協調制御、ハンドの自律位置情報によるマニピュレータの制御などにおいて先駆的研究を実施されました。

学会関係については、計測自動制御学会東北支部長、本部評議員、会誌編集委員会委員、日本機械学会東北支部長、精密工学会東北支部長、及び第八回日本ロボット学会学術講演会実行委員長などの数々の要職を歴任され、学会活動の発展に大きく貢献されました。平成八年からは日本工学会アカデミー会員としてご活躍なされています。

以上のように、箱守先生はわが国の学術及び機械システムの計測制御技術の発展に多大の貢献を果たされ、その功績は誠に顕著であり、このたびの受章は誠にふさわしいものと言えます。



機械系の復興と再生

機械系長 教授
三浦 英生

東日本大震災より二年が経過いたしました。会員の皆様におかれましては未だにお苦しみの方がおられるかと存じます。衷心よりお見舞い申し上げますとともに、互いに今後の復興に期待したいと思います。

大学キャンパス内では電気情報系、マテリアル開発系、人間環境系のそれぞれ本館が完全に取り壊され、これから新築工事が本格的に開始されようとしております。平成二十五年度が本格復興に向けた初年度という位置づけになろうかと思えます。機械系におきましては建物の復旧工事はほぼ完了いたしました、故障しました各種実験設備等もほぼ修理や更新が完了いたしました。

このような状況の中で平成24年度は6名の先生方が定年退職をお迎えになりました。航空宇宙工学専攻を立ち上げ育てこられた升谷五郎先生、医学研究科を立ち上げられ中核として推進なされた佐藤正明先生、山口隆美先生、情報科学研究科の発展に尽力されました出口光一郎先生、機械電子工学専攻、ナノメカニクス専攻の創設と牽引に尽力された江刺正喜先生、同じく機械電子工学専攻とバ

イオロボティクス専攻の創設と牽引に尽力され、機械系長として二期四年間機械系の運営をまとめられた和田仁先生です。単一年度で六名もの先生方をお送りするのは機械系としては空前でおそらく絶後の変革と考えております。これまでの先生方の偉大な業績と機械系の発展への多大なご貢献に感謝いたしますとともに、今後のご活躍とご健康を祈念したいと存じます。現任教員としましてはこれまでのご努力を真摯に受け継ぎ、さらなる機械系の発展に尽くしたいと考えております。

今年度卒業、修了を迎える学生たちも苦難の二年間を何とか乗り切ってくれました。必ずしも十分な教育研究環境ではなかったと思えますし、講義日程も変更的な中で、それぞれつらい思い出も残ったかとは思いますが、厳しい環境に耐え忍び、無事卒業、修了にたどりついたという達成感を大切に、今後の社会生活に何らかの形で役立ててほしいと切に祈っております。その一方で、進学や卒業、修了にたどりつけなかった学生も例年と比較しますと急増しております。やはり精神的な不安定と闘っている学生が増えていると考えておりまして、かなり工夫した支援が不可欠になっております。この問題に関しましては、工学部、工学研究科全体で支援体制を構築しております。機械系内に教育相談室を設置し、初代の相談員としまして井上克己名誉教授にご支援頂く予定です。

平成二十五年度から機械系の全ての低層実験棟の解体と新実験研究棟の新築工事が開始いたします。また、講義棟の耐震補強工事と老朽化対策工事が並行して

進行する予定です。これらの工事を通しまして、機械系キャンパス内の環境施設の抜本的な改革の実現を目指しております。教育研究環境に加えまして、事務部門と福利厚生関係環境の充実刷新を図ることでより魅力的なキャンパス環境の構築を進めていく予定です。二十一世紀中盤の社会の安全と安心に資する学術基盤と技術基盤を構築する世界拠点に相応しい環境整備を実現したいと考えております。

教育環境におきましては、現在工学部、工学研究科一体となり、教育研究に対する理念の再定義と、その理念を実現する教育システム、教育組織の大改革を進めております。機械知能・航空工学科としての共通学術基盤の習得と、卒業研究か大学院における修士、博士研究における高度専門知識や技術の習得と創成を、積み上げ型で強固な専門基盤の構築という位置づけでとらえ、地球環境や世界の人類社会の維持発展に中核として貢献する人材育成に尽力したいと考えております。現在の学生達はバブル崩壊後に生まれ、リーマンショックとともに育った世代であり、将来への夢を持ちその実現に胸躍らせ努力するという感覚を知らない世代です。今まで以上に、豊かで安全安心な社会実現という形で将来の具体的な夢を持たせ、その夢を実現する手段としての研究の魅力をわかり易く伝える術を、教員側は工夫して創成していかないと、若者の眼を輝かせることが難しい時代になっていきます。この点につきましては、是非社会で活躍しておられます先輩方のお知恵やご助力もお願いしたいと考えております。

東日本大震災以降、改めて人間個々の無力さを痛感する機会が増えております。今こそ人類の英知を結集して苦しさを乗り越え、次の世代に夢と希望を与えることが不可欠です。大学はこれまで個々の才能を育み伸ばすという視点で教育や人材育成を進めて参りましたが、社会の一員として活躍するという動機づけを明確にするためには、組織の一員としても個々が力を発揮するという価値観の醸成強化も不可欠になっていると考えております。学生や教員間のみならず、社会との有機的なネットワークを構築し、チームワーキングとして難問解決に取り

組むという教育研究体制創りと、その有効性の実証を強力に推進していきたいと考えております。必要な情報をタイムリーに集約整理し、新たな情報発信を的確に進めるためには、同窓会の先輩方との充実したネットワークの構築は不可欠です。このため、同窓会組織の再編強化も平成二十五年度は着手したいと存じます。

大学を取り巻く環境は、高齢少子化、グローバル化などとも関連しまして世界規模での競争が激化しております。これまでの東北大学機械系に所属された皆様

強固な基盤としまして、世界をリードする教育研究拠点として更なる発展を目指しますためには、同窓会構成員の皆様と現役教員、学生一体となりました協創、競走体制の構築が不可欠です。是非とも同窓会組織構成員の皆様のご理解とご協力を賜りたいと存じます。

最後になりましたが、同窓会より震災復旧復興支援で貴重なご芳志を頂戴いたしましたこと、改めて感謝と御礼を申し上げます。会員の皆様の一層のご活躍とご家族様含めましたご健勝を祈念させていただきます。

「若手研究者海外派遣による最先端科学・工学グローバル・キャリアディベロップメント」について

航空宇宙工学専攻 教授

吉田 和哉

より多くの若者に海外渡航経験をさせ、国際的視野に富んだ研究者を養成することを目的として、平成21年度の後半に、日本学術振興会より「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の公募がなされました。この公募に対し、機械・知能系を中心として、本学の大学院工学研究科、情報科学研究科、医工学研究科、流体科学研究所が連携し、「若手研究者海外派遣による最先端科学・工学グローバル・キャリアディベロップメント」と題したプログラムを提案し、採択されました。

同プログラムでは、平成22年3月より平成25年2月までの3年間にわたり、若手研究者等（学部学生、大学院生、ポスドク、助教、及びこれらに相当する職の者）を、海外の著名な大学・研究機関等に組織的に送り出し、海外での研鑽を通じて、将来を担う国際的視野に富む有能な研究者を養成することを目指し、本年2月に無事終了しました。

本制度では、助教・ポスドクについては、2ヶ月以上の長期派遣をすることが条件となっております。このプログラムの終了時には、機械・知能系の全ての助教が2ヶ月以上の海外経験を持つことを目指して、毎年計画的に人選を行い、3年間で計33名の助教・ポスドクを派遣しました。2ヶ月という期間は、派遣先でまとまった研究を行うにはあまりにも短い期間ですが、日常とは異なる環境を体験し、様々な相手と研究交流や討論を

行うことにより、新しいインスピレーションを得ることができた、との声が寄せられています。また、教育に関する考え方も国によって様々に異なり、日本の違いを知ることにより視野を広げ、また日本の良さや問題点を再認識するなど、今後の教育活動に対しても有益な成果が得られたと考えています。

学生については、半年ごとに公募を行い、英語による面接審査を実施して派遣者を選抜しました。派遣期間は2週間、1ヶ月とし、学会参加が主目的の渡航は不可としました。近年、海外に行きたいという若者が減少する傾向にあります。が、本プログラムにおいては常に希望者の方が多くという競争的な状態にありました。面接にて語学力を確認し、研究計画を詳しく聞かせてもらった上で、3年間で計60名の学生を派遣しました。多くの学生が、それぞれの修士研究、博士研

究の中で今回の派遣機会を効果的に活用し、大きな成果を得ることができたと考えています。また学生によつては、海外で開催された国際的なコンペティションに参加し優秀な成果を挙げた者や、海外の著名大学で開催されたサマープログラムに参加して専門知識を集中的に吸収し、人的なネットワークを築いたというケースもありました。

本プログラムは、世界と伍して切磋琢磨できる人材を育成することに、少なからず貢献できたと考えています。

なお、派遣プログラム参加者それぞれの研究内容や成果については、

<http://www.mech.tohoku.ac.jp/Overseas/>

にて詳しく紹介していますので、ぜひご覧いただければ幸いです。

米コーネル大学派遣報告

バイオロボティクス専攻 助教
浜田 省吾

工学研究科「若手研究者海外派遣による最先端科学・工学グローバル・キャリアアディベロップメント」のご支援のもと、昨年7月から9月にかけての二ヶ月間、米国コーネル大学を訪問する機会を頂いた。コーネル大学はアメリカ・ニューヨーク州北部のイサカという町にある。ニューヨークといえば大都会のイメージがあるかもしれないが、実のところイサカは大変のどかな田舎町で、ニューヨーク市から飛行機で1時間、もしくはバスで4時間ほどの距離を北上した、フィンガレイク（地図で見ると、指をひろげ

たかたち…というよりどちらかといえば爪痕のように無数の細長い湖が並んでいるのがわかる）とよばれる地方に位置している。アップステートニューヨークと総称されるこの北部地域は、金融や商業よりも、農業や畜産がおもな産業となっており、雰囲気としては道央に近い。そのようなイサカの町を見下ろす丘の上に広がるコーネル大学は、農学、畜産、獣医学部といった専門が自然と古くより盛んである。また、これらの学部にも所属していない学生も、学内でとれた牛乳やソフトクリームなどが食堂で食べ放題だったり、学内農場や近隣の農場でとれた野菜を販売するファーマーズマーケットが毎週開かれていたり、「地産地消」というかたちでこの大学と地域の特徴を感じることが出来る。さらに、大学内の川やそれをせき止めるダム（イサカには渓谷が多く、学内でもそういった変化に富んだ地形をみることが出来る）のまわりには吊り橋や遊歩道が整備され、植物園やプランテーションといった広大な敷地は研究のためだけでなく、学生や職員にとつて夏のレクリエーション・気分転換する場の提供としての役割も果たしている。余談になるが、上記に書いた植物園で自由に気分転換できるような環境とというのは、規模こそ違えども、青葉山のそれと近いものがあるかもしれない。また、コーネル大学は設立者の遺志を反映させ、現在も研究に重きをおき、実学を重視する姿勢をみせているが、そのあたる校風も実学尊重・研究第一主義を掲げる東北大学に似たものがある。

このように研究に恵まれた穏やかな環境のもとで、自分は「計算するDNA

ハイドロゲル」という新しい材料を設計・作製する基礎研究に没頭した。DNAという一般的な生物の遺伝情報担体と思われがちであるが、その実はひも状の分子であり、二本が絡み合うことで有名な二重らせん構造をとる。近年、このDNAを材料としてさまざまなものづくりをおこなう「DNAナノテクノロジー」という分野が米国を中心として盛んになりつつあり、自分もこの分野の研究者のひとりとして、DNA二重らせんを組み合わせてつくるタイル構造やリング構造などといったナノ構造の研究にこれまで従事してきた。今回コーネルで基礎的な研究を行ったDNAハイドロゲルは、いままでも自分が研究を進めてきたそのようなナノ構造とはすこし異なる



大学美術館よりキャンパス中心部を望む

り、マクロなサイズの「ゲル」をDNAだけで作る技術である。これまでのナノ構造と比較するとスケールははるかに大きい(指先に乗るサイズ)のだが、「DNA分子の特性を利用しながら、どのように二重らせん構造を分岐させて構造化させるか」という設計レベルでは、実はほとんどおなじ原理原則に基づいている。このことは、これまで多彩なナノ構造や論理回路といったものを作製してきたDNAナノテクノロジーの知見を、このゲルというあたらしい対象にも適用できるということを意味している。両技術の強みを統合することで、将来的には、例えばゲル自体が計算素子としても機能し、その結果がゲルのネットワーク自体にフィードバックを与えるような「考え、判断するモノ」の作製につながると考えている。材料自体にプログラム可能な機能を自在にもたせることができれば、現在当たり前とおもわれている、「モノ」そのものに対する「静的な」イメージすら一変するだろう。さらにこの技術を発展させることができれば、すでにDNAベースで実現しているセンサー、アクチュエータ、回路といったコンポーネントをすべてゲル内部に統合した、分子だけで構成された「ロボット」の実現といったものも夢物語ではない。

もちろん、このようなSFめいたものは一朝一夕に実現できるものではない。そこで今回は、このような将来をみすえた基礎研究を開始するという目的で、簡単な回路を埋め込んだDNAハイドロゲルの設計と作製を行った。具体的には、入力信号となるDNAが少量でもゲルにはいると、それをトリガーとして

連鎖的に分解反応が進み、最終的にゲル全体が溶解するというものである。今回訪問したDan Liao教授はDNAハイドロゲル研究の第一人者として知られており、夏の間、アイデアや実験手法などについて随時ミーティングさせていただくことで加速度的に研究を遂行することができた。とはいえ、もちろんすべてが順調にいったわけではなく、限られた時間との関係もあり、帰国の途につく直前まで試行錯誤は続いた。幸運なことに最終週になってようやく設計通りの挙動を確認することができ、未来につながる成果を得ることができたと考えている。今後はここで得た基礎的なデータとそれをもとに編み出したあたらしい独自の設計手法をベースに、特性のさらなる向上と、新たに発想したアイデアの設計・実装、システムのさらなる複雑化といった研究を進めていきたい。

最後になりましたが、新しい研究を開始することを快く認めていただき、このようなチャンスを与えてくださった村田智教授、留守中の研究室におけるさまざまな業務を代わりに受け持ってくれた野村M・慎一郎准教授と藤原慶日本学術振興会特別研究員、訪問を受け入れてくださったDan Liao教授と研究室の学生さん方に心より感謝いたします。

在外研究滞任記(英国ロンドン)

ナノメカニクス専攻 准教授

清水 裕樹

2012年8月より、8カ月間に渡る在外研究の機会を頂戴し、英国ロンドン



の国立物理学研究所(National Physical Laboratory、通称NPL)に滞在しました。NPLは世界でも有数の計測・計量標準に関する研究機関で、1900年の設立当初よりロンドン郊外の街Teddingtonに位置しています。今回は、微細形状の光計測に関する研究で著名なRichard Leach教授の研究チームにお世話になりました。現在、液晶ディスプレイ等に用いられる大面積・微細形状パターンの高速・高精度評価には主に光学式の測定機が用いられていますが、これら測定機を校正する際の「基準」となる光学式測定機プロトタイプの開発に携わりました。

NPLは国立の研究所ですが、その経営は政府契約の民間企業が担うというユニークなスタイルをとっており、基礎

研究のみならず企業との共同プロジェクトを強力に推進しています。欧米では個々の研究者が個室で仕事をするイメージが強かったのですが、NPLでは小プロジェクト毎に研究者3〜4人で部屋をシェアして物理的な障壁を極力無くし、コミュニケーションを円滑にする工夫がとられています。仕事とプライベートの線引きに対する個々の意識が大変強く、限られた勤務時間内に効率良く成果を挙げるための工夫が随所に見られます。基礎研究はテーマ設定及びタイムラインが漠然としがちですが、チーム内で議論を重ね研究が目指すべき具体的成果等を定量的に定めていくプロセスには、大いに学ぶべきところがありました。また、効率を重んじるその一方で、議論を重要視する文化が醸成されており、長時間に渡り議論する姿があちこちで見られます。理学部出身の研究者が多いせい、か、どうも雲をつかむような抽象的な話が多く、どんだん脱線していくこともしばしばです。在外研究者、学生インターンシップを積極的に受け入れる姿勢も大変印象的でした。特に学生インターンシップは期間を4ヶ月間程度に設定し、世界各国から優秀かつ意欲ある学生を受け入れています。ほとんどの学生は母国で奨学金を確保して参加していますが、足りない生活資金は近くのレストランでアルバイトしながら…という学生もおり、そのモチベーションには目を見張るものがあります。

さて、渡航直後はオリンピックで賑わっていたロンドンですが、地震がほとんど無い地理的条件もあって、建築物に関する概念は日本とは全く異なるよう

です。大抵の建物が築数十年ということも手伝ってインフラは脆弱で、電気・ガス・水道・電話…、8カ月で一通りのトラブルは経験したように思います。自宅フラットのエレベーターに妻と娘が2時間ほど閉じ込められたこともありまして。それでも、2歳の娘を抱えた我々にとつて、ロンドンは子ども連れに寛容で意外にも大変住みよい街でした。言葉が満足に通じないにも関わらず、日本にいた頃よりもご近所とのコミュニケーションは断然多く、妻と娘も毎日のように地元の子供クラブに参加して大変充実した日々を過ごしていました。

今回の在外研究は、この「コミュニケーション」について深く考えさせられた8カ月でした。例えば、今はどこでもメールが使えるので、日本と同じように仕事が出来たろう…と渡航前は考えていましたが、いざ日本を離れてみて、文字によるコミュニケーションの難しさを痛感



期間中、オリンピックマークが飾られた Tower Bridge

しました。実際、多くの方々に大変なご迷惑をおかけしました。その一方で、例えば言葉は満足に通じずとも、ほんの少しのきっかけで周囲とのコミュニケーションが円滑になることを、英国での生活で実感しました。例えば英国では、ドアを通過する際、次の人がドアに手をかけるまで前の人がドアを開けたまま待つ…という習慣があります。忙しい中でも双方が笑顔になれて、気持ちが上がります。これはほんの一例ですが、このような小さな積み重ねが我々のロンドンでの生活を快く感じさせたのではないかと思います。

個性的なメンバーが集まり、素晴らしい環境が整ったNPLでの研究活動、そしてロンドンでの生活は、毎日が刺激的で充実したものでした。このように大変貴重な在外研究の機会を快く与えて下さった高偉教授と、受入先NPLのRichard教授に、心よりお礼申し上げます。また、私の不在中に大学の業務をサポート下さるとともに暖かい言葉を下さった機械・知能系の先生方、研究室スタッフと機械・知能系事務スタッフの皆様にもこの場をお借りしてお礼申し上げます。最後に、慣れない環境の中、日々元気に私を支えてくれた妻と娘に感謝します。

派遣学生報告書

ナノメカニクス専攻 博士課程前期一年
高 研究室 細 瀧 啓 一 郎

昨年の九月中旬より約一カ月間、日本学術振興会による「組織的若手研究者等

海外派遣プログラム」を利用し、ドイツ中央部に位置するイルメナウ工科大学に滞在する機会に恵まれました。イルメナウ工科大学は精密ナノ計測の分野で世界をリードしており、特に超精密位置決めステージであるNPM (Nano Positioning and Nano Measuring Machine)を開発した大学として有名です。

このステージは走査型プローブ顕微鏡や白色干渉計など様々な形状測定用途に使用することができ、現在ドイツを中心にヨーロッパ各地の大学や研究機関で採用されています。私は滞在期間中にこのステージと変位センサを組み合わせた形状測定システムを組み、走査型白色干渉計による微細形状測定の実験を行いました。短期間ではありましたが、この実験を通してステージの機械的構造や制御方法、センサと組み合わせた形状測定の具体的な流れについて、理解を深めることができました。

さて、私にとってドイツへの渡航は今回が初めてでした。成田空港から飛行機で約13時間かけてフランクフルトに到着し、その後ICE (InterCity-Express、最高速特急列車) でエアフルト駅まで行くことと世話役のNorbert氏が迎えてくれ、彼の手でイルメナウ市内まで送っていただきました。その日は簡単に民宿の場所と学校への経路などを教わると、夕方から早速飲みに行こうということになり、大学の人たち何人かと共にレストラン兼バーのような店に入りました。そこから私はドイツ流の少し手荒い歓迎を受けることになりました。

まず、店に入るなり私が注文するまでもなく大ジョッキのビールが現れ、

Norbert氏お勧めめという豚肉とポテトの盛り合わせをいただきましたが、そのボリュームに圧倒されました。巨大な骨付き肉という漫画に出てきそうなスタイルで、日本で出せば4人前ぐらいの分量だったと思います。これを頑張っただけで達成感に浸ったのもつかの間、次はナイトクラブで飲もうということになり、学生が集まるガレッジのようなクラブへ行き、やはり瓶ビールを数本飲みました。そのクラブではイルメナウ大学の学生がバンド演奏(主にハードロック)をしていて、会場は学生の熱気に包まれています。

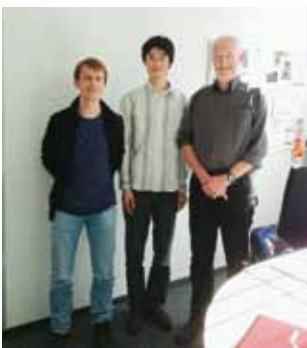
そんな中、“Welcome to Ilmenau, Jatta!”と言って私の肩を叩いてくれる方がいました。驚いて振り返ると、私より長身で(私は身長184cm)、白ひげのおじさんが瓶ビールを片手にほほ笑んでいました。何とこの方こそが、NPMに関する研究の第一人者であり今回私の滞在を許可していただいたEberhard Manske教授だったので。若者が集まるナイトクラブに教授がいる状況に大変驚きましたが、後で聞いたところによると教授は大の音楽好きで、その日に教え子が演奏をしていたので聴きに来たということでした。

予想外の出会い方ではありましたが、次の日に研究室でお会いしてディスカッションをした際には一カ月の研究計画をしっかりと確認することができ、その後の滞在生活を有意義に過ごすことができました。また、研究や飲みを通してドイツ人は勿論、留学生も含め何人もの友人ができ、海外での人脈形成・文化の理解という点でも大きな成果をあげることがで

きたと思います。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えていただきました高偉教授、イルメナウ工科大学のEberhard Manske教授に深く御礼申し上げます。また、渡航にあたってのサポートをいただいた研究室の先生方、機械・知能系のスタッフの皆さまにもこの場を借りて御礼申し上げます。



夕食にて (右端筆者)



教授室にて。左から、生活・研究全般でお世話になったNorbert Hoffmann氏、私、Eberhard Manske 教授

東北大学大学院工学研究科 次世代航空機研究センター

航空宇宙工学専攻 准教授
岡部 朋永

現在の航空分野では、環境に優しく、燃費効率の良い旅客機の開発が大変注目が集まっている。例えば、近頃、ANAがローンチカスタマーとして就航したボーイングの新型旅客機787（ドリームライナー）では、東レが開発した炭素繊維強化プラスチックを重量比で50%以上使用し、かつ新型高性能エンジンを搭載することで、20%程度の燃費改善に成功した。また、国内初のジェット小型航空機開発として注目を集めるMRJ（Mitsubishi Regional Jetの略）では、同クラスで先行するジェット旅客機の燃費に対して、機体の軽量化および空気抵抗低減と新エンジンの搭載を含めて2割程度の燃費削減を目標とし、開発が進められている。つまり、総合科学技術を必要とする航空機開発では、流体・構造・材料といった分野横断型の研究が求められる。また、産学連携もまた重要な要素である。航空機の開発には上記のような



C-MISORAの概念図

分野を横断した力学に基づく多面的な学術的なサポートが必要でありながら、現状、産学間の融合が十分であるとは言えないという課題がある。特に、世界に先駆けた次世代の航空機を提案・開発するために、企業の現場のノウハウと力学に基づく学術的な知見を融合することが必要不可欠である。本学、航空宇宙工学専攻と流体科学研究所では、国産旅客機の開発や複合材の材料開発等、大変ユニークな産学による共同研究を行ってきている実績がある。そこで、本研究センターでは、次のような組織体制によってセンターを構成し、世界に先駆ける次世代航空機の方向性を提案し、実証したいと考えている。

（材料グループ） 岡部朋永（准教授）

（構造グループ） 福永久雄（教授）、榎原

幹十朗（准教授）

（実験空気力学） 浅井圭介（教授）、大林

茂（教授）、上野和之（准

教授）

（計算空気力学） 澤田恵介（教授）、大林

茂（教授）、大西直文（准

教授）

（平成25年3月1日現在）

具体的な研究課題としては、次のようなものが挙げられる。

- (1) 複合材主翼の変形・破壊を対象としたマルチスケールモデリング
 - (2) 次世代航空機エンジン用セラミック基複合材ファンブレードの長期耐久性評価
 - (3) 流体・構造連成解析に基づく新規複合材機体の提案
 - (4) 次世代複合材超音速旅客機C-MISORAの提案（図）
- これらは、重工各社、材料メーカー、

JAXA等の支援を受けながら、既に取り組みを始めている。また、航空機産業はグローバルな分野であり、国内外に情報交換・発信の場を有することが大変重要である。本センターでは国際ワークショップの開催やWebseminarの開催等、多面的に展開をしている。活動の詳細は左記HPに掲載されているので、是非、ご覧いただきたい。

<http://www.plum.mech.tohoku.ac.jp/jisedat/information.html>

リーディング大学院 グローバル安全学トップブリー ダー育成プログラム

グローバル安全学教育研究センター長
機械システムデザイン工学専攻 教授
湯上 浩雄

我が国の将来を担うリーダーを育成することを目的として、文部科学省・博士課程教育リーディングプログラムが実施されています。機械系が参画しております「グローバル安全学トップブリーダー育成プログラム（平成24年度～平成30年度）」が平成24年度に採択され、安全安心分野のグローバルリーダーを育成する取り組みが開始されています。このプログラムの特徴は、明確な人材育成像のもとで研究科や専攻の枠を超えて、博士前期後期の5年間一貫教育にもとづく「博士学位プログラム」を提供することです。以下に概要をご紹介します。

【目的】

東北地域に甚大な被害を与えた東日本大震災は、地理的・社会的にグローバルに波及した災害であり、その影響は長期

にわたる時間スケールでの復興が必要であり、被災地域の社会基盤や産業基盤の本格回復には至っていません。さらには原子力発電所の再稼働を含めたエネルギー政策の大転換を議論せざるを得ない状況となっています。本プログラムでは、部局の枠を超えて文系・理系を含む学生集団で教育を行い、東日本震災に代表されるグローバルデザスターから人命・社会・産業を守ることに貢献できるグローバル安全リーダーをアカデミアのみならず、世界的企業や国際機関などの多様な分野に輩出することを目指しています。

【育成する人材像】

東日本震災が明らかにしたことは、防災目的手段の社会合意形成の欠如や、リーダー層の危機管理能力の欠如です。本プログラムが育成を目指す人材像は、人文学の素養、国際性、倫理観、そして明確なビジョンをもち、学術に立脚した確かな知識をもとに自ら考え実行できる能力を有すると共に、我国や世界が直面する、巨大地震や津波などの自然災害あるいは気候変動、エネルギー問題などの多様な事象に対応できるグローバル安全学分野のトップリーダー人材です。

【多様な部局が参加した文理融合型教育】

本プログラムの特徴は、災害科学国際研究所、工学研究科、理学研究科、環境科学研究科、文学研究科等の6研究科18専攻が参画することです。学生は、まず基幹科目として人文社会科学科目「哲学・社会学・歴史学など」を履修します。そのうえで本学に新設された災害科学国際研究所が目指す「実践的防災学」に基づく学際的かつ先端的な教育研究を行うと

共に、震災からの復興現場での活動や、世界的研究活動を通じて人材を育成することです。さらに人類社会共通の課題である気候変動や、原子力事故に代表される巨大システム事故への対応、世界的なエネルギー問題等の解決に貢献できる人材の育成に取組を展開していきます。

【研究科を超えて一体で修学】

リーディングプログラムに選ばれた学生は、リーディングプログラム院生として、各所属専攻に加えてグローバル安全学教育研究センターに所属して、異分野学生との交流の中で切磋琢磨することで、リーダーとして成長します。本センターには、部局や専攻を跨いで「安全安心を知る」「安全安心を創る」「安全安心に生きる」という3ユニットに分かれた教員が属し複数メンター制度のもと、学生が主体的に形成するユニット横断的な修学研究チームの指導にあたります。

【これまでの取り組み状況】

本プログラムでは1年次(修士1年生)に30名の学生を募集します。平成25年度からの本格実施に向けてカリキュラムの策定や学生募集などを行っています。現在(2月)セレクトシオンプログラムの一環として、「グローバルビジョン研修」を実施しております。これは、プログラムに参加する意思のある学生に対して、異文化理解の重要性、自分自身の将来ビジョンの見つめ直し、さらには自分の考えを相手に伝える研修です。この研修に加えて英語研修を実施したうえで、書類審査および面接審査により、意欲が有りリーダーとしての資質がある学生をプログラム院生として選抜する段階にあります。本プログラムは、産学連携をもとに学

生の教育をすることを求められています。このことから、機械系同窓会各位に本プログラムの教育にご協力いただく機会が多いかと思えます。ご指導・鞭撻よろしく申し上げます。

国際機械航空工学修士コースの状況

機械システムデザイン工学専攻 教授

小野 崇人

機械・知能系では、世界から優秀な学生に来てもらい国際化を推進するため、機械・航空工科大学院コース (IMAC-G) に引き続き、際機械航空工学修士コース (International Mechanical and Aerospace Engineering Course: IMAC-U) コースを開設しました。これにより、学部から大学院まで一貫して学ぶことができる、英語コースとなりました。平成23年10月に一期生8名が入学し、平成24年10月には2期生10名が入学しました。国籍は、中国、タイ、インドネシア、韓国、アメリカ、トルコ、パキスタンなど多岐にわたる。皆、元気に勉学に励んでおります。第1期生は震災があった直後であるにもかかわらず、合格者から辞退者が出なかつたことには大変感謝しております。担当教員などが、各国の高校に出向いて広報活動を行ったり、海外の高校生を仙台に招待してサマースクールを開設したり、積極的な誘致を進めています。開設した年は、震災の影響もあり応募が少なかつたのですが、広報活動が功を奏し、徐々にその認知度も上がり、多くの問い合わせと応募が寄せられるようにな

りました。

国際コース入学者が英語の授業のみで卒業できるように、学部においても英語授業が多く開設されています。日本人の学生も英語授業に参加して単位を取れる他、実習や実験の講義においても、日本人学生がボランティアとして海外からの留学生を支援するなど、日本の学生にとっても刺激になっているものと考えます。平成25年4月にはいよいよ第1期生が研究室に配属され、研究活動を開始することになります。将来は、大学院に進んで研究の第一線で活躍したり、日本の企業に就職したりして日本と海外を結ぶ架け橋になる人材になるものと期待しております。

震災後の機械・知能系建物の 本格復旧

機械系環境施設整備委員会
ナノメカニクス専攻 教授
高 偉

前号の機械系同窓会ニュース(第17号)でもお知らせしましたが、震災により青葉山キャンパスでも多くの建物が立入禁止となりました。幸い、機械・知能系の建物は他系の建物に比較するとダメージが少なく、震災後も利用可能な状況でしたため、緊急的な応急処置を施し、震災から2ヶ月後の平成23年5月には研究・教育活動を再開しました。その一方、あらためて詳細を確認しますと建物へのダメージは決して小さくなく、早期の補修工事着手が望まれていました。

このような中、応急処置が一巡した平

成24年3月上旬より、建設業者による建物の災害影響一次調査が始まりました。その後、4月下旬から5月中旬にかけての機械・知能系の構内道路関係工事(外溝工事)を皮切りに、本格的な補修工事が始まりました。震災からの復旧をアピールすべく、7月末に開催のオープンキャンパスに間に合わせるために、比較的ダメージの大きい1号館・2号館の補修等を優先して補修作業は進みました。5月中旬からは1号館・2号館建屋の外壁補修に着手し、6月からは機械・知能系共同棟を含めた建物内の廊下・階段の壁補修を進め、何とかオープンキャンパスに間に合わせました。

オープンキャンパス後、共同棟の外壁補修が再開され、また1号館・2号館及び共同棟を含めた各研究室内の建物補修が進められました。特に共同棟およびマイクロ・ナノ棟周辺の外溝はダメージが大きく、補修は8月末までかかりましたが、9月末には建設業者による工事が全て無事終了しました。

震災後、機械・知能系では、震災でダメージを受けた建物への応急処置、および研究室毎の余震対策等によるハードウェア面に関する対策を全学に先んじて進める一方で、ソフトウェア面でも安全衛生室を中心として安全巡視および授業時間中の大規模な避難訓練等を実施して、まだ研究室に配属となっていない学部生も含めて、災害への備えに対する意識付けに取り組んで参りました。現在も、災害への備えを万全とすべく、研究室内の設備固定等について全学的に対策に取り組んでいるところです。

機械・知能系建物の復旧事業にあたり、

機械系同窓会から多大なるご支援・ご援助を頂き、誠にありがとうございます。また、様々な方面からのご支援・ご援助、大変感謝いたします。機械・知能系同窓会会員の皆様も大変ご心配されたかと存じますが、お陰様をもちまして、機械・知能系の教育活動は平常状態に戻っております。また、震災後に進めた地震対策により、震災以前よりも安全な研究・教育活動が可能な環境が整いました。会員の皆様には、お知り合いの方々に機械系の復旧が進んでいることをお伝え頂ければ幸いです。



機械・知能系共同棟 外溝
(修繕前)



(修繕後)

学生支援に関するご報告

航空宇宙工学専攻 准教授

永井 大樹

東北大学機械系同窓会では、毎年、機械系の学生に対して様々な支援を実施し

ております。5月には毎年恒例の工明会運動会に機械系4専攻と流体研の各代表者に2万円ずつの支援(計10万円)、また機械系の女子学生に対する支援(10万円)、3月の卒業証書授与式後に開催される謝恩会に謝恩会支援として院生会会長に10万円の支援を行っております。

特に昨年度の機械系ニュースでもご報告しましたように2011年3月11日の東日本大震災において、ご家族が甚大な被害に遭った学生に対して、特別の支援を行っております。この支援は、被害の大きさや復興に時間がかかることを考えると単年度で終わるものではなく、学業継続に支障が出ないように継続して支援していくこととしており、今年度も7名の学生(昨年度は8名で、一人が卒業)に対して支援を行いました。なお、この被災学生支援に関しては、会員の皆様からの震災寄附金より一名当たり10万円の支援金をお渡ししております。この場をお借りしまして、ご寄付頂きました会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

震災支援を受けて

機械システムデザイン工学専攻

博士課程前期二年

西山 研究室 新沼 啓

始めに、今回の東日本大震災に関しまして、多大なるご支援を賜りました機械系同窓会、並びに会員の皆様にはこの場をお借りして深く御礼申し上げます。皆様のご支援がありまして、無事に修士課程を修了し、4月から社会人として新たなスタートを切ることができました。また、

このような形で皆様にお礼を申し上げられることを大変嬉しく思うと共に、東北大機械系の一員であることをとても誇りに感じます。

まず、私の当時の状況について説明します。私の実家は岩手県大船渡市・大船渡湾のすぐそばに建っており、海拔は8mほどでした。海までは直線距離で100m以下という立地もあり、あの大津波をもろに受け実家は全壊してしまいました。幸いにも両親と兄弟は無事でしたが、隣の陸前高田市に住んでいた祖母は亡くなってしまい、非常に残念で悔しい思いをしました。また、私の住んでいるアパートはライフラインの復旧が遅く、ガスが1か月使えませんでした。しかし、このような状況ではありましたが、私の指導教官である流体研教授の西山秀哉先生と同じく流体研准教授(当時講師)の高奈秀匡先生をはじめ、研究室の皆様や部活の仲間の助けもあり、何とか機能的な状況にはならず済みました。その後私の家族は内陸の方に移り、元気に暮らしております。以上が私の震災の状況です。

私が震災に関して思うところは数多く

に触るかなのような当たり障りのない話でかわそうとする人は結構いて、それらがかえって辛く感じられることがあつたから、そうではなく、変わらぬいつも通り接してくれる人がいることはとても心強くもあり嬉しく感じました。確かに、私は周りから見れば不運な部類に入っていたと思いますが、だからと言っていつまでも可哀想な目で見られていたのではたまたまのものではないのです。もちろんその人に悪気がないことは十分に承知していますが、それでは全く前に進みません。そのようなことがありましたので、いつものように接してくれていつものように笑い、楽しく過ごせたことがなよりの励ましになり、辛い時でも乗り越えられたのかなと今では感じています。特に研究室の先生方や先輩方には大変お世話になりましたので、感謝の念に堪えません。

色々書いてきましたが、この修士課程の2年間、何不自由なく過ごせたのも周りの皆様の助けがあつたからこそです。この2年は様々な経験もできたこともありとても充実していて、修士に進んでよかったなと心底感じております。

最後に、4月から社会人ということでは今度私が学生を支援する側になります。もちろん金銭的なことだけではなく、様々な面で協力させて頂くことで恩返しをしていきたいと思っております。これからもより一層精進して参りますので、今後ともよろしくお願ひ致します。

機械系広報推進室の活動

機械系広報推進室

機械システムデザイン工学専攻 教授

厨川 常元

機械系では、主に高校生に向けた広報活動を積極的に行っております。少子化の進む現代においては、意欲を持ち、より優れた理系人材を育てていくため、大学の魅力を伝える広報活動がますます重要になってきております。そこで、より多くの小・中・高校生に対して、東北大学機械系の魅力を伝えるために、2007年に広報推進室を設置しました。これは広報担当の教員9名と専任の事務補佐員1名で構成されております。機械系紹介のためのパンフレット制作ウェブサイト(<http://www.mech.tohoku.ac.jp/>)の管理や更新、出前授業や学校見学などのアレンジ等の広報活動を行っています。また毎年7月末に行われるオープンキャンパスにおいては、機械系オープンキャンパス全体の運営中心として、その企画や準備を行っております。東北大学機械系に入学することによって自分がより成長できる、また尊敬できる人に会える等、大学生活をよりポジティブにイメージしてもらえよう、今後も積極的に広報活動に取り組んでいきます。

機械系同窓生の皆様方には、引き続きご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

産学連携推進室だより

機械系産学連携推進室

技術社会システム専攻 教授

中田 俊彦

ようやく春の芽吹きを感じるころとなりました。機械系同窓会会員の皆様にも、機械系産学連携推進室の最近の活動をご紹介します。平成12年度に発足した本組織は、教員10名と事務スタッフ1名からなり、機械系2号館317室を拠点として業務を進めています。室長は、発足時の庄司教授(精密、39)から引き継ぎ、太田教授(機械、40)、井上教授(精密、44)、福永教授(ゲスト会員)和田教授(機械、47)、横堀教授(機械II、48)、三浦教授(ゲスト会員)山口教授(ゲスト会員)と続いてきました。おもな業務は、企業と大学間の共同研究等の連携機会の情報提供と、学生の就職支援の二つです。前者は、会員制の機械系産学懇談会を通して、研究室見学会を年四回開催、研究室紹介誌OPENを毎年発行しています。就職支援は、大学推薦を依頼する求人企業に対して、学内で企業別推薦枠を決定し、学生の志望に基づいて推薦しています。今年度は、約400社延べ1,000名の求人数に対して、136名を推薦しました。残りの学生は、自由応募にて就職しています。最近では、博士課程を修了後に企業に就職する学生も、約15名に増えていきます。

機械系同窓生の皆様方には、機械系研究室との連携と、卒業生の就職に関して、引き続きご支援をよろしくお願ひ申し上げます。

最終講義

ナノメカニクス専攻 准教授

清水 裕樹

平成25年3月31日をもちまして、升谷五郎先生、和田仁先生、中島美樹子先生、江刺正喜先生、佐藤正明先生、山口隆美先生、出口光一郎先生、徳山道夫先生が定年退職を迎えられます。これに先立ちまして、下記のとおり最終講義が行われました。

2月18日.. 機械系 第一講義室

「設備共用へのこだわり」

江刺 正喜先生

「極超音速エンジン内の混合と燃焼」

升谷 五郎先生

2月19日.. 機械系 第一講義室

「バイオメカニクス研究の道を歩んで」

佐藤 正明先生

「計算生体力学の30年」

山口 隆美先生

2月22日.. 機械系 第一講義室

「3次元空間の画像計測」

出口 光一郎先生

「Auditory Mechanics」

和田 仁先生

2月28日.. 流体科学研究所 大講義室

「ガラス転移理論の構築を目指して」

徳山 道夫先生

3月5日.. 総合研究棟 1001室

「国際教育交流に携わって」

中島 美樹子先生

どの最終講義においても、在校生、卒業生、教職員および関係者が多数詰めかけて最後の講義に熱心に耳を傾けていました。

長きにわたるご指導、本当にありがとうございました。ますますお元気で、更なるご指導の程よろしくお願ひいたします。

同期会報告

機械三十年卒同期会



後、予てより本会継続のため運営簡素化のアンケート結果についての報告があり、以下の案件について出席者全員の賛同を得ました。

①開催地、開催場所、開催日を決めて置く。今回開催場所の東京新橋第一ホテル内「アンシヤンテ」にする。開催日は5月第4金曜日とする。但し仙台開催については在仙諸兄と相談の上決める。

②近況報告は各位の消息を知る上に唯一の手段のため事務局がまとめる。

③会計報告は簡単にし、記念写真と合わせて事務局が後刻会員に送付する。

④幹事は場所選定の役目が省けるため、当日の集金と議事進行役となり一人とする。選任法は有志者とする。有志がない場合は前任者の推薦とする。

次いで事務局より消息途絶えがちな同期生の電話による聞き取り情報の紹介後、本年1月死去の木村勝昭兄の冥福を祈り、本会の哀悼の意を表すべく一分間の黙禱で総会終了。

「青葉三十機友会」は2年毎の開催でしたが、古い先を考え元気なうちにといつしか毎年開くことにはしてませんが、昨年は大震災のためスキップし、今年は5月25日に2年振り東京新橋第一ホテル内「アンシヤンテ」で開催となりました。19名の同期生とご夫人2名の計21名が出席しました。

先ず泉山会長より遠く名古屋、仙台からも旧友との再会の慶びと、春の叙勲で小林陵二兄が瑞宝中綬章を受章の披露の

の片付けで骨折。ポンペイ展の場面が頭をよぎったこと。日頃便利で文化的な生活に慣れているため極限状態との落差に

よるショック大。また老いの坂を登る上の体験談として脳血腫除去手術、腎結石破碎後の難行苦行を乗り越え諸兄との再会の喜びが語られた。一方元気な会員から急斜面を三浦雄一郎とスキー滑降し、ネパールの世界最高地ホテルでの傘寿祝賀の話題がありました。長生きすると苦しい事、楽しい事、種々の経験が豊かな人生形成に連なることでしょう。

来年2013年5月24日(金) 13時00分〜@第一ホテル「アンシヤンテ」での再会を約して散会しました。

鎌田 悠紀雄
(機械工学科30年卒)

機械三十一年卒同期会

本年度の同期会は、11月8日、横浜桜木町フシントンホテル最上階(24階)の中華料理店「東天紅」に10名が集り、みなとみらいを眺望できる個室で行われました。

西尾代表幹事から開会の挨拶があり、続いて指名された金沢幹事が乾杯の音頭を取り、6月に逝去された菅野隆氏のご冥福を祈りました。

次に同期生全員から寄せられた近況報告が披露されました。全般的に様々な加齢現象が報告されましたが、西尾代表幹事からは運転免許更新時の検査結果から5、60代の反応力を維持しているという嬉しい報告がありました。たまたま数日前に配達された機械系同窓会誌第16号に掲載された同期生4名の記事に触れ、投稿者の健闘が称えられました。記事の標題と投稿者は、「原発事故に寄せて」(小野寺朗)、「科学の限界認識と神への想い」



後列左から小野寺朗、金沢和夫、佐藤忠教、羽根田健、中島力
前列左から渋谷俊徳、大野庄康、西尾宣明、小田桐祥二、穴戸俊夫

(佐々木瑞朗)、「ホームページとブログで遊ぶ」(西尾宣明)および「私と本」(羽根田健)でした。

懇談では健康と長寿について話がはずみましたが、一般に画家は長寿であると言われるので、絵画展に出展している西尾、小田桐、穴戸の諸兄が長寿を保つであろうと他の出席者たちが勝手に話していました。

最後に次回幹事を渋谷俊徳、佐藤忠教の両君にお願いし、再会を期して解散しました。

小野寺朗
(機械工学科31年卒)

機械三十七年卒同期会

隔年実施してきたクラス会を平成24年4月20・21日長野県松本市で開催した

(実際は昨年の予定だったが東日本大震災の影響で1年延期)。当日は素晴らしい好天と桜の満開に恵まれ、幹事は胸をなでおろした。というのも前回仙台富沢でのクラス会が満開の桜の時期に合致して素晴らしい、引き継いだ幹事には天気と開花状況が大変気がかりだった。在籍50数名のクラスで逝去された学友6名を除いた29名という多数の参加を得た。この2月に市川昌弘君が16年という長い闘病生活の後に亡くなられた。君は電気通信大学教授としてまた日本機械学会の要職にあつて(昨年機械学会名誉員に推挙された)一層の活躍が期待されていただけに残念だ。同君はトップ入学の秀才で数々の研究業績を残しながら、志半ばで無念だったと思う。

20日午後、JR松本駅に集まりホテル送迎バスで白骨温泉 白船グラウンドホテルに到着。雪見をしながら温泉につかった後宴に移った。近況を報告しあつたが、卒業後50年ということで多くの友人が第一線を引きそれぞれに充実した生活を楽しんでることが紹介された。2次会では当然のように話題は原発再開の是非にかかわるものだった。機械工学科では原発に関係する重工業で活躍した友人が当然多く、時には激論にもなつたがそこは気心の知れた中で親睦の枠を越えるものではなかつた。また仙台で罹災した山川君からはライフラインが停止したときの集合住宅上階の生活の悲惨さを聞いた。

翌日は上高地に向かった二人(原、菱沼君)を除いて、全員チャーターバスで山を下りながら安曇野を巡つた。雪をいただく日本アルプスを遠景に水を張った水田や農村風景そして桃、桜など春の花

の対比が素晴らしかった。安曇野から松本市内に入った。途中二人の東北大学総長(熊谷岱藏、大谷茂盛、なお初代澤柳総長は6才まで松本市在住)を輩出した母校(松本深志高校)の前を通つて、市中心に入った。松本城の堀を巡る桜の開が見事だった。ここで名古屋から当日参加の春日井君が合流。そして市東郊の旧制高校記念館を訪ねた。ナンバースクールから始まり終戦までに40校の旧制高校があつたが制度廃止にともない次第に忘れ去られ、散逸しかかつていた資料や物品、記念品を一堂に集めて昭和56年にオープンしたものである。館長さんが



旧制二高に重点を置きながら短い時間の中で興味深く説明して下さった。次回は2年後後に関西地区での開催と決まった。全員が元気で再会できることを切に祈りたい。

矢崎 陽一・三浦 浩

(機械工学科37年卒)

機械四十七年卒同期会

秋真っ直中の、平成24年の10月27日(土)、28日(日)に機械工学科卒業40周年記念同窓会が、同級生の橋君(岩沼屋ご主人)の協力を得て、秋保温泉岩沼屋にて開催されました。

恩師の阿部博之先生と猪岡光先生にお越しいただき、お二人から近況を交えた訓示を戴きました。その後、青春時代に思いを馳せつつ大宴会を開くことができました。

お二人ともお元気で、参加者全員と酒を酌み交わされ大いに盛り上がりました。

同級会1日目昼の部は東北大学工学部機械系の第一講義室に集合し、同級生であるパイオロポテイクス専攻教授の和田君の講義と最近の大学の状況・機械系の発展の様子を楽しく拝聴し、40年ぶりの大学生気分を味わいました。パンフレットには機械系の新しい学科コース構成が紹介されており、昔はシンプルだったことから、選択の余地があるのも大変だと(感慨深く)時の流れを感じました。

1日目夜の部の宴会では恩師を囲み、自己紹介する暇もなく話に夢中になりました。その後は各部屋に集まって思い出話やまじめな話で夜遅くまで語り合いま



機械工学科棟の屋上にて

した。

47年卒同級会はこれまで約10回ほど開催されましたが、東京地区開催と仙台開催を約3…1の割合で行っています。横浜在任の万年幹事の渡邊君と、いつも駆けつけてくれる万年スナップ写真担当の齋藤君には大変お世話になっており、今回の記念写真も齋藤君にお願いしたものです。同級会に恩師の先生方をお招きするのもしばらくぶりです。また今回は今までもなく同級生が多数の参加で、先生方に同級生それぞれが近況を報告することができました。今回は奥様同伴を



岩沼屋での大宴会

最前列：橋君、竹内君、渡辺君、和田君、丹野(報告者)、長沢君、飯塚君、齋藤君
二列目：久保君、中山夫人、油谷夫人、阿部先生、猪岡先生、大日方君、岩本君、油谷君、中山君
最後列：栗原君、野上君、幅君、久保田君、森下君、福原君、浜津君、渡井君、長谷川君、鈴木君

呼び掛けた同窓会でしたが、初めての試みだったせいか、3組にとどまってしまう。次回は是非とも多数組の参加が期待されます。
昭和47年卒はいわゆる団塊の世代ですが、大学時代に学生運動を経験した者もいます。小学校からすし詰めの教室で学び、また高度経済成長期のなかで卒業し、日本の成長と停滞を経験、そして現在、年齢はだいたい63歳と、同級生の多くが第二の人生を始めている、あるいはその時期に掛かっています。翌朝は岩沼屋さんの喫茶部で歓談し、次回また合おうと約束して解散、終了となりました。

丹野 顯

(機械工学科47年卒)

機械第Ⅱ五十七年卒同期会

平成二十四年十月六日、七日の一泊二日で秋保温泉・佐勘にて、紅一点の中島先生（旧三戸研、現工学研究科国際交流室教授）にもご参加頂き同期五十五名中、二十一名が集い三年ぶりに同期会を開催しました。

三年前の横浜開催時に、次回は二年後に仙台で開催しようと全会一致で決定していましたが、三・一一東日本大震災でやむなく断念。一年後の開催になんとか漕ぎ着けてくれた、仙台近郊在住の幹事諸君には感謝しきりです。

今回は、青葉山キャンパスツアー、佐勘での豪華宴会、片平キャンパスツアー



の三部構成の企画です。まずは第一部青葉山キャンパスツアー。中島先生にツアーコンダクターをお願いし、我々が勉学その他に勤しんでいた旧機械系棟を中心に見学させて頂きました。現在、旧機械系は機械知能系と改組されており、我々の頃は知能は無かったのかとの議論になりましたが、当時の所業を振り返ると確かに無かったかもと、全員で納得した次第。卒業後三十年が経過し、何処に何があったのか忘却の彼方でしたが、製図室に入ると、徐々にポイラー製図等で製図板と格闘した日々が甦って来ました。とんでもない板厚の設計をした者、他人の図面を窓ガラスに貼り上からトレースする者等等で盛り上がりました。因みに今も、「他人の図面は写さないこと」の大きな注意書きが掲示されています。

続いてメインイベントの佐勘での宴会。幹事代表の鈴木雅美君の挨拶から始まり、各研究室代表の当時の思い出や近況報告に対して鋭いツッコミもあり大変楽しい会となりました。そんな中で、仙台市役所勤務の遠藤守也君より、東日本大震災直後の被災状況、その復興状況の生々しい写真も交えた報告がありました。遠藤君の復興活動での活躍は、新聞でも取り上げられており、本当に頭が下がる思いです。その後、幹事部屋へ移動し、深夜まで懇談。一部の人の怪獣のようなイビキもあり、全員疲れ切った状態で翌日の片平キャンパスツアーに突入しました。

片平ツアーも中島先生がツアーコンデです。片平キャンパスに足を踏み入れると、金木犀の清々しい香りで、前日の疲れも

吹っ飛びました。片平キャンパスは市街地では珍しく、昔と変わらず多くの樹木で覆われており、今後もこの環境を是非維持して欲しいものです。昔からあつた生協の建物が廃屋状態で残っていましたが、その中で今でも理髪店が営業していたのにはびっくりです。その後仙台台駅で解散し、各自無事に帰途に就いた次第です。

今回の予定は未定ですが、皆が仕事現役中に一度は開催したいものです。今回は仙台チームが頑張ってくれたので、今回は首都圏チームかな。安田君、梶山君よろしくね。

今泉 弘・大場 芳晴
(機械工学第二学科57年生)

精密三十八年卒同期会 卒後51年目の同級会

平成22年の秋、関東住まいの精36卒の同級生の集まりの折り、卒業50年目を記念して、仙台で同級会を開こうと言う話が出た。

それまでも卒業20年目には仙台で同級会を開いたりしたが、関東以西に就職した者がほとんどということもあり、それ以外は東京や熱海などでの開催が多かった。通常集まれる同級生の他に、ヤフー掲示板で繋がっている同級生にも話を持ちかけ、ほぼ全員の賛成を得ての同級会開催が決まった。

当然の事ながら仙台生まれの行動派の山崎君と塩竈生まれの筆者が、臨時の世話人ということことで、まずは50年目の4月、桜の季節に仙台に集合することにし宿泊は秋保、その他の詳細は世話人が纏めることになった。大体の予定や出席予定者

も決まり、秋保温泉ホテルの予約も済んで、後は桜の開花が予定通りになれば言うこと無しと言うことで、後はその日を待つばかりとなった。

平成23年3月11日、思いもかけぬ東日本大震災が発生、だんだんと被害状況が判ってくるにつれ、同級会開催の是非に關してもいろいろな意見が出されたが、状況が落ち着くまでは取りあえず中止と様子を見ていたが、桜が咲き夏が過ぎ



ても、東北が落ち着いたと言う感じはなく、卒業50年目中に同級会が開けるような雰囲気には成らなかつた。

東京、横浜に住んでいる同級生達は、それでも数ヶ月ごとに集まって、話し合つたりしていたが、だんだん51年目でも良いのではないかと言う雰囲気になり、また少しでも東北のためになればと言う気にもなつて来て、51年目の同じ時期に開こうかということになつていった。

明けて平成24年4月18日13時、新幹線仙台駅の中央改札口に集まつた同級生は12人。同級生33人中欠けた人を引いても少ないと思える人数だったが、人によっては数十年ぶりに会う人もいるなど、年齢を考えればまあ仕方無いことだろう。早速、予定のコース、中央通りから1番町を下つて片平キャンパスまで歩き始めたが、仙台の変貌ぶりに信じられない思いをした人がほとんどだった。

片平町の北門付近は雰囲気こそ残っていたが、建物は明らかに違つている物が多く、キャンパス内の学食「いちよう」と思われる建物は残つているが、今も使われているのだろうかと思わせた。精密の研究室の建物は残つていたが、その南側の木造の教室は既に無く、皆の残念という声がかかれた。

戻つて北門前からタクシーに分乗、まず川内キャンパスに向かう。運転手の説明では、今は教養部とは言わないような。特に地震の被害もなさそうな様子だったが、我々の教養部時代とは、どことは言えないが、かなり雰囲気が違う。やはり時代の流れか。

そこから青葉山キャンパスに向かう。

近づくにつれブルーシートで囲われた棟や、プレハブの教室、立ち入り禁止の建物など、我々が思つていた以上の被害があつたようで今後の復興が急がれるところだ。

八木山越えの三神峯行きの道は、我々の時代には荒れ果てた山道だったが、今や市街地を行くよううで、ただただ驚かみだった。さて今回の目玉の一つ、懐かしの三神峯は公園となり、中央南側にあつた講堂も無く、新しい売店兼案内所のような建物になつていたが、それ以外は公園としての手入れが実に良くなされていて、芝生に寝転がったあの頃以上に思えた。

思えば昭和32年4月、皆で希望を胸にここに集まつてきたのだ。思い出は尽きないが、開花宣言の出た日の思い出に、少しか桜のほころびた「明善寮懐古の碑」を囲んで記念写真を撮影した。

その夜の秋保の宿での語らひは読者の皆様のご想像にお任せし、51年目の同級会の報告と致します。

加藤 尚臣
(精密工学科36年生)

精密三十七年卒同期会 卒後50周年記念同窓会

平成21年に東京で同級生が集まつたと、卒業50周年の集まりは是非仙台でやろうという話が出て、自薦幹事10名がメールでの情報交換と、平成23年5月より数回の会合を重ねて、「精密37年卒業50周年記念同級会」の詳細を詰めてきました。

東北大にまだまだ居場所のある人見宣輝

君が中心となり進めましたが、特に会合では梅原誠君に東京での打ち合わせ場所とワインを提供してもらい、そのワインを飲みながら実施計画をまとめてきました。厳密な計画には、永久保輝昭君の現役バリバリの工程管理と記録、馬場光一君の調査や宿との調整、厳しくもやさしい梅原君と岩間章君のダメ出し、それぞれの幹事の個性豊かな発想などが大いに役立ったことは言うまでもありません。

その間、3・11の大地震と津波があり、同級生の中には多少の被害をこうむった人もいましたが、東北大学の被害に比べれば、まず無事といってもいいでしょう。話題が原発事故に及んだことも度々ありました。

我々は、太平洋戦争開始直前に生まれ、戦中戦後の食べ物も充分にない時代をなんとか生き抜き、豊かではなかったが楽しい学生時代を過ごし、幸いにも空前の売り手市場で一流企業に迎えられ、懸命に働いて日本の高度成長期を支え、バブルがはじけ景気が悪くなる寸前にリタイアして、年金暮らしの身分になりました。この様に世の中が大きく変革する時代は、今までの日本の歴史の中では無かったのではないのでしょうか。

でも未だにシルバースーツに座るには一寸抵抗があるが、気が付けば若者に席を譲られるようになり、ひげをそる時に鏡を見れば、こんなジジイになったかと少し悲しくなり、物覚えが悪くなる一方物忘れはどんどん進み、耳が遠くなってもオシッコは近くなり、少しの段差につきまづき、脚立から落ちて足を痛め、それでもないかと背筋を伸ばしてジジムサクならない様むなしの努力を続けているの

です。

我々が入学したのは今は無き富沢校舎、その秋には米軍施設の跡をそのまま教室に利用した川内に移り、寒い冬は亜炭ストーブがチヨロチヨロと燃えていました。3、4年は片平丁で勉強しました。冷房などは考えもませんでした。

卒業後キャンパスが青葉山へ移転しましたので、我々のイメージとしては、青葉山は伊達正宗像のある城址、植物園と歩いて行ったイチゴ狩りしかないのです。

在学中にチリ地震による津波被害、ローマオリンピック、卒業2年後に新潟地震と東京オリンピックおよび東海道新幹線が開通しました。

50周年同級会は平成24年9月5日に行われました。宿は社長の橘晴哉氏が機械系出身ということもあり、秋保温泉の岩沼屋さんにお願いました。特別に仙台駅との送迎にも配慮いただきました。これに答えて参加者は時間前に続々とバスに乗り込み、バス乗り場案内役の不肖加藤は一安心。バスから秋保温泉へはすばらしい道が続き、近くにはアウトレットモールの建物がそびえ、昔の面影今いずこの感を深くしました。

昭和37年精密卒業は39人で、物故者4人、都合で出席できなかったのが11人、出席者24人（奥様同伴1人）。噂によれば卒年によっては、奥様同伴の会合が普通になっているグループもあるとか。

受付で会費と引き換えに渡された袋には、あらかじめ提出されていた各人の近況報告をまとめた小冊子と5日と6日のスケジュール表、50年前の研究室ごとと卒業後の会合写真、これから歌う歌詞が

入っていました。これらは岩間君の力作です。加えて馬場君がまとめた「東北大学の学生寮とキャンパス」のCD。それに機会あるごとに提供される千木良賢作君からの七味唐辛子も入れてあります。



温泉で疲れをいやしたのち広間に集まり、座が乱れないうちにとまずは記念写真を撮り、坂水久之君の司会で開会。人見君の発声で亡くなられた恩師、同級生と3・11被災者に黙とうしたのち、坂水君の指揮で復興支援ソング「花は咲く」を歌い、いよいよ宴となりました。最速方九州から参加の伊知地勝弘君の首頭、乾杯し、酒井高男先生、永井伸樹先生、箱守京次郎先生（合計年齢は250歳を超えています）のご挨拶、特に箱守先生には「旧精密の活動空間の映像記録を見る」と題した懐かしい映像の披露がありました。幹事が時間オーバーを心配していた一人一分の近況報告も時間内に終わり、何度となく繰り返される乾杯とあちこちで花咲くお喋りと楽しい時間が過ぎてゆきました。肩を組み若き日を思い出しながら「青葉もゆるこのみちのく」を歌い、千木良君の3本締めで2次会へと移りました。

2次会では、馬場君得意の手品で始まり、山崎隆一君がリードして思い出しながらのギーギー節、有志が持参した貴重な酒とつまみが出され、遅くまで歓談が続きました。何故クラス会では皆よくしゃべるのでしょうか。それは、普段同居人とあまり話すこともないし、たまに若い人と会っても、また同じことの繰り返しだと言われ、意見は無視されるのです。しかし、同級生となると話が弾むのは、同じ時代を生きてきたので、バックグラウンドが分かり、共感することが多いからなのです。

なお、その後カラオケ場まで遠征し、さらに遅くまで歌った剛の者が多々あったとのことであります。

次の日は、先生をお見送りのち、宿のバスで駅への直行組とキャンパス見学組に分かれました。青葉山キャンパスでは、厨川常元先生、嶋田慶太先生、藤田美穂子さんのご案内で、青葉山キャンパスの3・11の被災状況とナノ加工研究の説明を伺い実験室の見学をいたしました。（ちなみに我々の時代はミクロン加工でした）。

片平丁キャンパスでは、当時の面影を残す旧学生ホールに床屋が残っておりました。旧精密の鉄筋コンクリートの建物は、サッシュュが変わっていましたが未だ現役でした。

ついで高橋邦弘先生の案内で、流体力学研究所を訪問、沼田大樹先生の説明により、火星ヒコキの風洞実験設備を見学させていただきました。さすが老いたりとはいえ元技術者、専門的な鋭い質問が出て、お互いに有意義な時間を過ごせたと思っております。ところが見学後に異動した北門食堂まではものすごい雨。食事後一部の人は仙台駅へ、残りのメンバーは被災地見学に向かいました。閑上、多賀城、松島、奥松島とまわり、厳しい現状をまのあたりにいたしました。被災された方には改めてお見舞い申し上げます。

現役の方のご協力を得て作られた名札があまりに立派でしたので、次回（10年後か?）もそのまま使おうと言う意見が出ております。同級生の皆さん置き場所を忘れないように、仏壇の引き出しにも入れておいてください。間違っても長い名前に変わらないように。

今回の幹事の役割分担は、全体まとめ、スケジュール調整と先生への案内を人見

君、しおりなどの資料作成を岩間君、宿との折衝連絡を馬場君、会計を永久保君、写真撮影を唐津建春君と岩間君、駅でのバス案内を加藤、受付を梅原、坂水、永久保、馬場、人見の各位が行い、助言協力を千木良君と小川覚君にもらいました。さらに岩間君から会合終了後2週間で、今回の全てを収めたCDが欠席者を含めた全員に送付されました。これには全員感激、その努力には頭が下がります。

我々は第一線をリタイアし、最期の火をチロチロと燃やしている日々ではあります。今後機会を見て同級生で集まり歓談し、被災地の復興を願いつつ日本のエネルギー政策を議論し、東北大の更なる発展とそれぞれの健康を願っていきたいと思っております。

加藤 敏弘
（精密工学科37年生）

精密三十九年卒同期会

平成24年4月12日、関東在住者主体の精密同期会が昭和39年卒業後約半世紀振りに東京港区南青山のおしゃれなレストランで開催された。我々の同期会は過去に1回だけ、東京の一杯飲み屋の2階でローカルに開かれたことがあった。その後は個人的にゴルフやテニスで会ったり、研究室単位で飲み会を持ったりということはあったものの何故か同期会はやって来なかった。

そんな中、今回48年ぶりに古希を過ぎて実現できたのは、幾つかの偶然が重なった結果で、幹事役を務めてくれた白川貢君のご尽力に負うところが大きかつ



た。
彼は或る日、上記南青山のレストランの開店祝いに招待された。その祝賀会の席上オナーの身内の者から紹介された出席者の中に同じ精密工学科出身の老紳士が居たという。偶然にも双方39年卒の同期であることが判明。相手は卒業と同時に長期海外赴任となり同期との交流は全く途絶えていたという。懐かしさのあまりお互い話が弾み、同期の者に声かけをして数人だけでも会おうじゃないかということになり、開催場所は奇遇ともいえるご縁をくれた当該レストランと決めた。

た。これが今回の関東地区有志同期会実現の発端であった。

早速連絡を取り合っているうちに次第に輪が広がり、案内の対象者を関東在住者に拡大、情報を聞きつけて遠方からの出席希望者などもあったが、座席の容量から先着22名でお断りせざるを得ないという悲鳴とも言える苦しみを味わわされた。

48年ぶりに会った者も多かった。既に古希を過ぎていたこともあり、名乗られても思い出すのに時間を要する場面も多々見られた。きつと街で会っても分かんずくにすれ違ったであろう。その意味でも却って初対面の如き新鮮味を含んだ掛けがえない人生の再会であった。

宴会は洋風の上品なコース料理を賞味しながら順番に自己紹介。各人それぞれの近況報告というより卒業後四十余年に亘る長い人生ドラマの紹介にみんな興味深く聴き入り大いに盛り上がった。まだ仕事を続けている者もいるが、大方は自由な時間をボランティア活動や趣味に使い、地域社会への関わりを深めながら、充実した暮らしを送っている者も少なくないように感じられた。

来年(2014年)は卒業後50年の記念すべき節目の年となる。今回は開催地を仙台に移し、精密39年卒全員参加の同期会を開くことを満場一致で決めた。同期という絆で結ばれた学友たちとの再会の余韻に浸りながら帰途についた次第。

高橋 恒松
(精密工学科39年卒)



精密五十七年卒同期会

4月21日、例年より少し遅めの桜咲く頃、精密工学科S57年同期会を、卒業30周年の節目に開催しました。日本各地に散らばっている卒業生が仙台に来ることは、微力でも復興の助けになるだろうという開催の主旨の下、仙台に集まりました。現役世代のため、海外赴任者もおり業務の調整が困難であったりして、卒業生の出席者としては少数の16人の参加となりました。30年振りの再会で面立ちも変わっていましたが、すぐに打ち解け懐かしく在学時の話の輪が広がりました。

同期会に先立ち、精密工学科を訪問しました。厨川教授にお会いすることができ、震災の直後の混乱の中、活動拠点となって復旧に当られたこと、留学生の帰国の手配が大変であったこと、また、最近の本学の状況、工学部内で機械系が最も人気がある専攻となっていることなどを伺いました。

在学時にお世話頂いた恩師の先生方にご列席頂きました。(写真左より、加藤正名先生、永井伸樹先生、佐藤裕久先生、酒井高男先生、江村超先生、箱守京次郎先生)

退官されてなお、研鑽を積まれているお元気な様子を何うにつれ、私達も力を頂き、現役世代として益々頑張っていかなければと感じました。

最後に全員肩を組み「青葉萌ゆる」を歌い、次は、卒業35周年で再会を誓つての閉会となりました。

幹事を行うときに、遠方に住んでいるため恩師の先生にどのように連絡できるかはある意味不安でしたが、本会開催に際し、機械系同窓会より名誉教授の先生方の連絡先の照会させて頂くことができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

高野 克博

(精密工学科57年卒)



事務局より

「事務局日より」

お手元に届いた機械系同窓会ニュースはいかがでしょうか？先輩方と現役世代をつなげる使命観と、それをお手伝いできるよろこびを励みに、事務局の仕事に取り組んでいます。変わらず巣立ちゆく卒業生を眺めつつ、ふと若かりし頃の自分の姿を重ね合わせます。仙台開催の5月総会にどうぞお越してください。(幹事 機械58 中田俊彦)

■同級会(同期会)ニュース

報告・記事の原稿を投稿して下さい。字数800～1,000字位、記念写真一葉と一緒に送して下さい。封筒に原稿在中と明記にこと。送り先は機械系同窓会事務局。

■同窓会誌にご投稿を!

テーマ自由。約2,000字。事務局にご連絡下さい。執筆要綱をお送りいたします。

- ・住所変更の場合、必ず新住所をご連絡下さい。同時に旧住所の最寄郵便局で新住所宛の回送手続きを行って下さい。
- ・海外に駐在される方は、駐在先の住所をご連絡下さい。帰国後は、直ちに現住所をお知らせ下さい。
- ・懐かしいお写真を事務局までお寄せください。会誌、ニュースレター、ホームページに掲載させていただきます。
- ・紙面の都合で、会員の訃報は同窓会誌に掲載いたします。

■同期会の開催を支援致します

同期会等の開催支援を致します。開催計画がお決まりになりましたら機械系同窓会事務局までご相談ください。同期会の開催予告等をホームページやニュースレターに掲載いたしますので、ご連絡下さい。(ホームページは随時、ニュースレターは発行の2カ月前まで受付致します。)同窓会HP <http://www.mech.tohoku.ac.jp/dousou/>

平成24年度通常総会予告

平成25年5月18日(土)13:00から東北大学大学院工学研究科・工学部中央棟2階大会議室(青葉山キャンパス センタースクエア内)にて開催されます。皆様お誘い合わせのうえ、多数のご出席をいただきますようご案内申し上げます。

詳細は、同封の平成24年度通常総会・特別講演会のご案内をご覧ください。

編集後記

今号より紙面スタイルを変更いたしました。ご感想をお寄せいただければ幸いです。同窓生の皆様におかれましては、機械系の活発な活動をご周知頂き、今後ともご協力頂ければ幸いに存じます。最後になりますが、原稿執筆にご協力頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。(Y・T)

■同窓会事務局

月・水・金 10:00～16:00

Tel/FAX 022-795-6926

E-mail dousou@mech.tohoku.ac.jp